

昭和36年8月12日釧路沖地震  
 についての状況報告\*

釧路地方気象台

550.346

被害

昭和36(1961)年8月12日0時52分ごろの地震\*\*による一般的な被害は、8月31日現在、道警釧路方面本部、釧路支庁の調査によると次のとおりである。軽傷4名、家屋一部損壊11戸、集合煙筒倒壊15基、水道管破裂5、ガス管破裂1、炭焼きがま破損403基、道路損壊1、木橋全壊1、また釧路市、厚岸町ではウィンドガラス、陳列品破損などの被害が多数あったほか、鉄道、通信、電力、港湾などの施設に多少の被害を生じた。

余震

第1表に釧路で観測された余震回数および余震のP~S別回数を示す。

海震



写真1 家屋の損壊(釧路市内)  
 手前ブロック積み の塀が崩壊し、家屋の一部が損壊 (北海道新聞釧路支社提供)

\* Kushiro L. M. O.: Report on the Kushiro-oki Earthquake of August 12, 1961 (Received Nov. 10, 1961).

\*\* 地震月報によれば  $\lambda=145^{\circ}34' \pm 03'$ ,  $\phi=42^{\circ}51' \pm 02'$ ,  $O=00h 51m 31.9s \pm 0.5s$ ,  $h=80 \text{ km}$ ,  $M=7.0$ .

日魯漁業KK所属の第八あけぼの丸(341総トン、現在水庁産に監視船として備船)は0時51分ごろ、北緯42°49.5' 東経144°39.4' 付近を漂流中海震を感じた。当時当直中の同船二等航海士大沢真治氏はその模様を次のとおり述べている。「0時52分ごろ、突然ドドドーという大きな音とともにあたかも座礁したような激しい衝撃をうけ、ついで小刻みな上下の振動があり、引き続きドドドーという音とともに2回目の衝撃を感じた。その後再び小刻みの上下振動が続き、最初の衝撃から7~8分後にごく小さな音とともに弱い衝撃があり、それ以降は平常に復した。最初の衝撃で就寝中の船員は一同起床したが、船中のものが倒れたり踊り出すようなことはなかった。はじめ座礁と考えたのでただちに水深測定を行ったが、水深は89mであった。当時海面は油を流したようななぎであったが特に海面に変化は認められなかった。なお本船は船首を北~北北西に向け漂流中であった。また、8時40分ごろにもごく小さな海震を感じた。12日0時における同船付近の気象状態は、風向東北東、風力1、天気晴、気圧1014mb、気温16.0°C、水温15°Cであった。

第1表

日	余震回数(含本震)						P~S 時間別回数					
	0	I	II	III	IV	計	<sup>s</sup> 7-8	<sup>s</sup> 8-9	<sup>s</sup> 9-10	<sup>s</sup> 10-11	<sup>s</sup> 11-12	不明
	12	19	7	0	1	1	28	3	6	11	6	1
13	6	2	0	0	0	8	1	2	1	2	1	1
14	3	0	0	0	0	3	0	1	0	2	0	0
15	4	0	0	0	0	4	0	1	2	1	0	0
16	3	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	2
17	3	0	0	0	0	3	0	0	1	1	0	1
18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	1	0	2	0	0	3	0	0	1	1	0	1
20	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
21	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1
22	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0
23	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
24	1	0	1	0	0	2	0	0	0	2	0	0
25	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0
26	1	0	1	0	0	2	0	1	0	1	0	0
27	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
28	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
29	7	0	1	0	0	8	1	0	0	3	1	3
30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
計	55	9	7	1	1	73	5	13	18	23	4	10



写真2 陳列商品の被害（釧路市内瀬戸物店にて）  
（北海道新聞釧路支社提供）

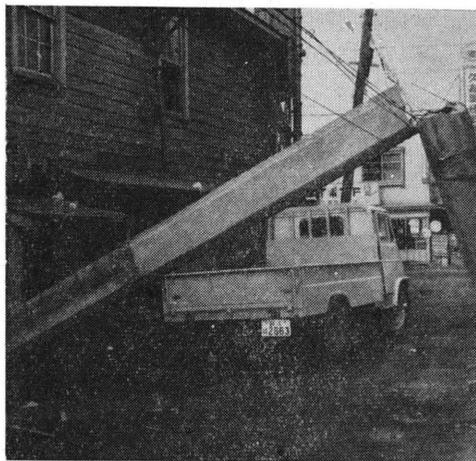


写真3 集合煙筒の倒壊（釧路市内）  
（毎日新聞社撮影）